
初雪

進藤直道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初雪

【Nコード】

N4807BA

【作者名】

進藤直道

【あらすじ】

どこかの国の、名も知らぬ人のお話。

（前書き）

これはフィクションです

十二月の残り日数も、片手で数えられる程になった。赤道近くに位置するこの小さな島でも、涼やかな日を過ごせるようになっていく。

『——明、○×諸——で、——』

島の大通りの一角に、小さな店がある。客らしき青年が、グラスに入った飲み物を空け、髭をたくわえた店主に抗議の声を上げた。

「親父さん、そのラジオどうにかしてくれよ」

カウンターの隅にある、所々銀の塗装が剥げたそれは、大人の手のひら程の、ラジオにしてはやや小さめなものだった。ラジオは自己主張するように、甲高い音波をしきりに出している。青年が店に入ってからしばらくたつが、ラジオのノイズはひどくなる一方だ。

親父さんと呼ばれた店主は青年を一瞥し、洗い物を続ける。

「馬鹿言っちゃいけねえよ。まだこいつは使えるんだよ」

「なんでさ。さっきからうるさいノイズしか聞いてないぞ。悪いことは言わないから、もう買い換えたらどうだ」

「おいおい、こいつは日本製だぞ？ モノ作らせたらとんでもねえ国の代物だぞ？ そんなとこのモノが、そう簡単に壊れるなんてことはねえんだ」

「けど、こうも使えないんじゃない、諦めたほうがいいだろ。また日本製のやつでもなんでも買ったらいいいじゃねえか。それだけの話じゃないのか？」

青年の一言に店主は言いよどみ、バツの悪い表情が浮かぶ。店主の手は気づかないうちに止まっていた。

「……今は少し調子が悪いだけだろ。じきによくなる」

店主の吐き捨てるような言い方に、青年は苛立ちよりも、また別の何かを感じた。粗雑な口調の割に、店主の目はどこか悲しそうであつたのを、青年は見てしまったからだろ。

「なにか、こいつを使いたい理由でもあるのかよ」

「……それはもうよさそうだな」

そう言くと、店主は青年が使ったグラスを下げ、洗い始めた。青年の疑問に店主は答えない。

青年は、店主はもう触れてほしくないのだろうと解釈し、この話は止めようと決めた。店主に背を向け、タバコをくわえる。片手で器用にマッチを擦り、火をつけた。煙がゆらりと立ち昇っていくのを、青年は手を仰いで掻き消した。向かいの店を見やると、親子連れが幸せそうに飯を頬張っている。

しばらく二人は何も喋らなかった。店主は食器を磨き、青年は紫煙をくゆらせる。路上からの音が聞こえる。車のクラクションや町ゆく人の声、音という音が全部混ざって溶けていく。

そうしてどのくらい経っただろうか。三本目に手をかけた時、青年は背中から独り言のような呟きを聴いた。

「息子が送ってくれたのさ」

青年が振り返ると、店主は気恥ずかしそうな顔をしていた。青年は目を丸くした。場の雰囲気かいたたまれなくなったのか、店長は矢継ぎ早に言葉を重ねる。

「息子が日本に留学中なんだよ。顔は似てるが頭はあいつの方がよっぽど良い。日本の大学に行って、経済だか経営だかを勉強して、この店を大きくしたいんだと。これは、あいつが稼いだ金で買ったそうだな」

使い古されたこのラジオは、店主にとって、替えのきかない宝物だった。それを知った青年の視線は店主から離れ、揺れながら地に落ちた。

「そうだったのか……悪かった」

「いや謝ることはねえんだよ。実際もう壊れかけだしな。正直なところ、買い換えた方がいいのかもしれない」

「いや、それはずっと使うべきだ。その方が良い」

店主が苦笑いを浮かべる。

「おいおい、さっきと言ってることが違うじゃねえか」

「それは俺が何も知らなかったからだ。親父さんが話してくれたから俺も言うがな、俺も昔、大事にしたモノがあったんだ。本当に大事にしてたんだ。けど、さっきの俺みたいに捨てるなんて周りの声が多かった。そうしたらだんだんそれが大事じゃないような気がして、それで……」

「捨てたのか？」

「……ああ」

「後悔してるのか？」

「もう十分過ぎる程したよ。これはこれでいいんだ。俺が流されて招いた結果かもしれないが……これでいいんだよ。納得してる」

くわえたままのタバコに、青年は火をつける。深く吸い、それを細く、長く、吐き出した。

「だから、そいつはずっと大事に持つときなよ。俺みたいに後悔してからじゃ遅いからさ」

青年のおどけた様子に、店主は微かな笑みを浮かべ、調子を合わせた。

「そんな決まりきったこと、若造に言われんでもわかつとるわ」

「それもそうか」

と言つて二人は笑った。

向かいにいた子供が声を上げる。二人が気づいて振り向くと、あり得ない光景が広がっていた。

空から小さな白いものがゆっくりと舞い降りてきていた。

「ゆきだー！」

子供は大はしゃぎで通りに飛び出していた。

「よかったな。サンタさんがまたプレゼントをくれたんだね」

子供の父親が微笑むと、子供は満面の笑みを浮かべて、父親に抱きついた。

青年はタバコを揉み消し、顔を紅潮させて叫んだ。

「親父さん、雪だ！ 初めて見るけど、綺麗なもんだな！」

「こいつはすげえ……。息子が帰ってきたときに話ができるな」

「ちよつと触ってくる！」

たまらず青年が出口に向かう。

「おい！　せめて金を払ってから行け！」

店主は青年の背中を負う。扉の閉まる音が尾を引いて、消える。誰もいない店内に、ノイズ混じりのラジオ放送が響く。

「――返しお伝え――す。本――× 諸島――で行わ

れ――水爆実験ですが、――していた危険水域を大幅に超え

――、アメリカ政府から――。○ × 諸島の島民の皆様

にお伝えします。水爆による放射性下降物が島に降灰する恐れがあり非常に危険です。くれぐれ――」

島に降る初雪の中で、青年が、店主が、子供が、父親が、笑っている。

皆楽しそうに、笑っている。

（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4807ba/>

初雪

2012年1月13日02時55分発行